

# 安楽寺だより

第34号

紙面内容

- 2面 浄土真宗の「真宗とは？」
- 3面 東本願寺報恩講法要に参拝
- 4面 日本仏教史⑱ 昭和時代(中)

編集・発行 安楽寺住職 吉田 和良  
 名古屋市瑞穂区井戸田町一の八〇  
 電話 〇五二(八四一)二六〇六

## 今年も二河白道のおはなしを続けます

この念を作(な)す時、東の岸にたちまちに人の勧むる声を聞く。「仁者(きみ)ただ決定(けつじよ)してこの道(みち)を尋ねて行け。必ず死(し)の難(がた)なけん。もし住(とど)まらば、すなわち死(し)せん」と。...

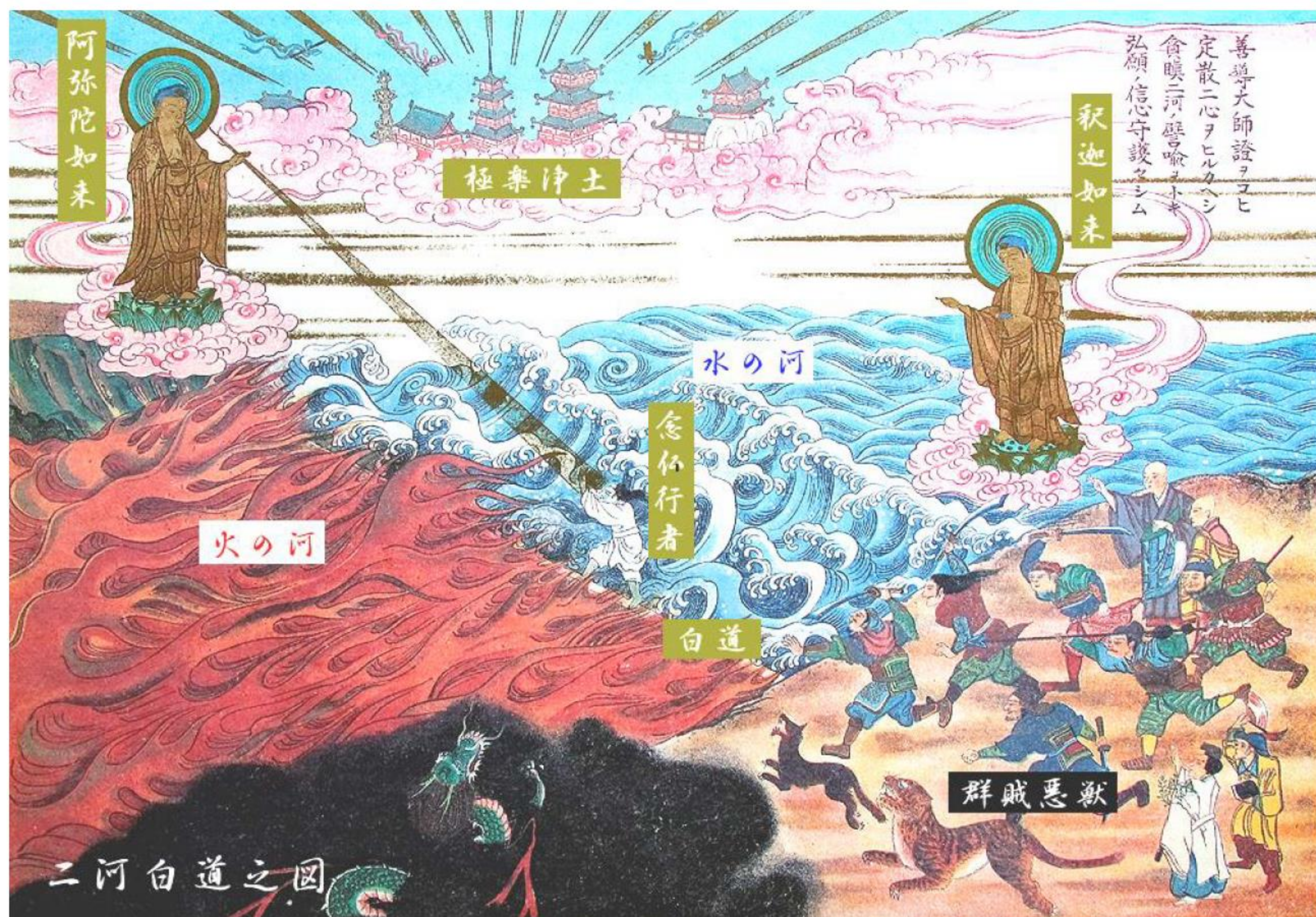
親鸞聖人が大切にされた善導大師の「二河白道のたとえ」のおはなしは、浄土を求める旅人が「白道」を歩む決断をした続きになります。

『東の岸に、たちまちに人の勧むる声を聞く』

この「東の岸」とは、私たちの現に生きている世間、出口のない此岸であり、そこで「人の勧むる声」とは、釈尊をはじめとする諸仏・親鸞聖人や私たちのご先祖の勧める「み教えや呼び声」であります。これを【釈迦・諸仏の発遣】と申します  
 「たちまちに」とは、突然のことであり、予想しなかった声を聞くのです。

『仁者、ただ決定してこの道(みち)を尋ねて行け、必ず死(し)の難(がた)なけん』この「決定して」とは、こ

# 明けましておめでとうございます



## 二河白道のたとえ その⑧ 東岸から人の勧むる声を聞く

ころを定め(腹を決め)て、「この道を尋ねて行け」とは、阿弥陀さまのおしえを聞き「白道」を行きなさい。お念仏を申しつつ大切に・丁寧に歩みなさいとい

うことです。  
 「必ず死の難なけん」とは、先号(三十三号)で述べました「引き返すことも死、立ち止まることも死、前に進むことも死(三定死)」という死の難など決してありはしない、ということ

です。  
 仏説無量寿経の下巻にある本願成就文に『諸有衆生(仁者)聞其名号(人の勧むる声を聞く)信心歡喜(ただ決定して)乃至一念(この道を尋ねて行け)・即得往生 住不退転(必ず死の難なけん)』とあります。  
 このお経の文は、阿弥陀仏のご本願が、かならず私たちのところまで届けられ、成就してくださる姿をあらわしています。

「み教えと呼び声」に励まされて、白道を行く確かな想いを持ち、この道を生きるのがあります。

## 「こころを定めてこの道を尋ねて行け」



# 真宗とは？



親鸞聖人熊皮御影

真実のおしえに  
照らされて  
真実を生きることを  
旨とする

真宗とは、まことを生きる宗（中心）とする  
ことです。真実のおしえとの出遇いを願い、真  
実を生きることが自分自身の生きる宗（旨）と  
なることを表わします。

仏説無量寿経の最後に『真実のおしえを聞き  
て、信じ受け取ることは、たいへん難しく、こ  
れ以上難しいことはない』と、お釈迦さまは説  
かれています。

**なぜでしょう？**

おしえの内容が難しく理解できないと申さ  
れているのではなく、『おしえに遇う・おしえ

は聞くことが難しい』と、申されているので  
す。出遇えない・聞けない私たちの方に問題  
があるのです。

親鸞聖人は、『邪見・傲慢の悪衆生』と表され、  
「私たちの邪見・傲慢が、真実のおしえに遇  
えない原因なのだ」と言われます。

三帰依文（真宗大谷派勤行集表紙裏参照）  
の最初には、「人身受け難し、いまずでに受く。  
仏法聞き難し、いまずでに聞く」と述べられ  
ています。

つまり真実に出遇うことによって、遇い難  
くしていたのは、私の邪見・傲慢のこころや  
姿勢であったと分かった、いうことです。出  
遇ったからこそ、「受け難し・聞き難し」とい  
えるのです。出遇えないままならば、そのお  
しえがあることも分かりません。遇ったから  
こそ、遇うことの難しさ、それを妨げていた  
ものが見えてくるのです。逆に言えば、遇い  
難くしていたものが明らかになることが、出  
遇ったあかしでもあるのです。

親鸞聖人は、真宗を『浄土真実』として表  
されます。「浄土が真実の世界であり、浄土は  
真実としてはたらく」と言われるのです。浄  
土は、私たちの邪見と傲慢にもとづく世界（穢  
土）の事実を照らし出す世界です。浄土の真

実は、私たちの事実を明らかにするので  
自分自身の事実を認めたくない邪見がそのお  
しえに背を向けてきたこと、また自己を正当  
化しようとする傲慢の心が、おしえを聞くこ  
とを妨げてきたことも知らされ、私たちは初  
めて本当に頭が下がるのです。

穢土の事実を知らせる浄土の真実おしえに  
出遇った者は、それを知らされて歩むことが  
生きる宗（中心）になります。私たちの邪見・  
傲慢は無くなる訳ではなく、浄土真実にその  
事実を知らされ、その穢土を課題として生き  
ることになるのです（ワンコイン「真宗」参照）



2019年1月1日 安楽寺修正会



# 本山御正忌報恩講に参拝

昨年十一月二十六日、二十二組の寺院・ご門徒百二十名の皆様と、バス三台に分乗して、本山東本願寺「御正忌報恩講」に参拝致しました。穏やかな晩秋の小春日和で、予定どおり真宗本廟に着きました。



全国各地からご門徒数千名の皆様が参拝され、賑やかな様子でした。乗車したバスから御影堂西側の駐車場で降り、阿弥陀堂との間を通り正面に着いた頃には法要が始まりました。

御影堂前の白州に於いて記念撮影をした後、御影堂の親鸞聖人の御真影前に正座し、お勤めを聴きながら静かに参拝いたしました。毎年の報恩講に参拝してはいますが、前卓に飾られた仏花は見事な荘厳で、参拝された皆様を惹きつけます。

参拝を終えた後は、左京区岡崎にあるホテル平安の森京都で昼食をいただきました。その後、バスに乗って東山を通りぬけ、琵琶湖に近い大津坂本にある日吉大社に参詣しました。

今回の団体参拝のご参加されました皆様には、厚く申し上げます。来年の報恩講も、ぜひご予約下さいませよう宜しくお願い致します。

## 帰敬式を行いました



昨年十一月十三日の報恩講には、多数のご門徒の皆様にご参詣をいただき誠にありがとうございました。十二日の午後には帰敬式を執行いたしました。今回は三名のご門徒の皆様にご受式していただきました。

全員で「三帰依文」(仏・法・僧の三宝に帰依するお言葉)を唱和した後、剃刀(おかみそり)の式を行ない、お一人づつに法名を伝達しました。受式者を代表して大河内さんから「誓いのことば」をいただき、全員で正信偈をお勤めして式を終えました。来年も執り行う予定ですので、ご希望される皆様はお申し出ください。



# 仏教豆知識

第三十四回



## 日本の仏教

歴史 その⑰

### 昭和時代(中)

昭和初期から日本政府は、思想・信仰への統制による挙国一致の戦時体制を推進し、仏教団は天皇制護持・戦争協力に組み込まれていきました。また政府は、尊皇護国・忠君愛国の啓発のため神社を特別保護下におき、いかなる宗教信者であれ神社を崇敬するよう強制し、これに反する言動に対し、厳しい弾圧を加えました。

政府は、満州事変・日華事変など中国大陸侵略政策を進めるうえで「皇道精神」を植え付けるため、宗教組織を利用しました。

大谷派をはじめ、いくつかの宗教団体は、朝鮮・中国大陸に開教使等を派遣し、寺院を開設し、日本陸軍と一体となって宗教工作や文化・教育工作に組織をあげて推進しました。

また政府は、靖国神社に、戦没者を護国の

#### お詫び

先回(第三十三号)の4面写真のお名前は、竹中彰元氏(一八六七—一九四五)でした。謹んでお詫び申しあげます。竹中氏は、岐阜県大谷派明泉寺住職で、昭和十二年に「反戦言動」を行なったことで陸軍刑法「造言飛語罪」で逮捕され、禁固四カ月・執行猶予三年の有罪判決となった。大谷派は当時「布教使」資格剥奪処分などをしたが、平成十九年処分を撤回し謝罪を行なった。



英霊として祀らせ、天皇崇拜と軍国主義の普及に大きな役割を担わせました。

昭和十六年(一九四一年)太平洋戦争が勃発すると、宗教団体は、「大東亜戦争完遂翼賛大会」を開いて、戦争への協力を誓いました。ここに国家の御用宗教として、政府の政策に積極的に奉仕することになっていきました。

昨年末に中日新聞に掲載された海外十大ニュースの一番目は「南北・米朝が首脳会談」でした。一年前まで核実験・ミサイル発射を繰り返してきた北朝鮮・金委員長がアメリカトランプ大統領と、六月に直接会談し、北朝鮮の安全保障を条件に、朝鮮半島の非核化を約束しました。▼半年が経過した現在は、その後の進展があったとはいえません。しかし、いまにも日本にミサイルが飛んでくるとの危機感が高まっていた世論が大きく転換しました。▼今後どうなるか予測できませんが、日本国がとるべき道は、緊張緩和にむけて対話政策を一層進めることが必要です。▼決して軍備力増強により抑止力を高める、日本政府の安全保障政策に組みすることなく、戦争を否定する憲法九条を持った「平和国家日本」を発信することが大切です。